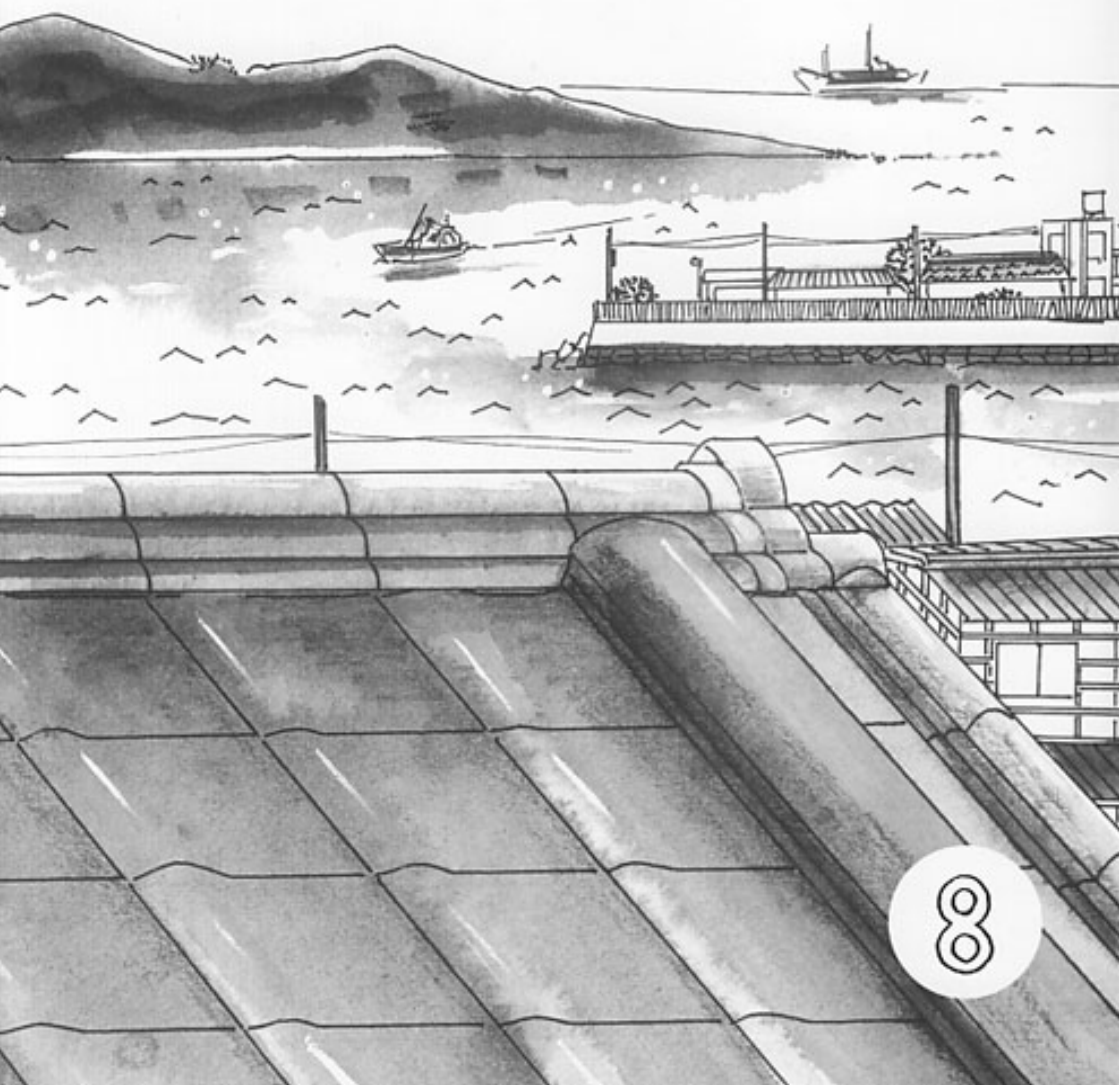


令和2年8月5日発行(毎月5日100発行)
第60巻8月号(通巻733号)

風土



虫籠に酒吹きたかり誕生日

(句集『四温』より昭和四十九年作)

昭和四十九年は桂郎師にとって記念すべき年で、『俳人風狂列伝』で第二十五回読売文学賞を受賞しています。さて桂郎師の誕生日は八月六日で、この年で六十六歳になります。その誕生日に虫籠に酒を吹きかけたいと言っているのです。「鈴虫よお前も祝ってくれよ」ということでしょうか。そんなことをしたら鈴虫が酔ってしまいますよ。他にも「ひぐらしや急ぐ由なき家路にて」という句もあり、この頃の枕郎師のゆとりが感じられます。

爽やかに糶の指数ひしめける

(句集『四温』より昭和四十九年作)

桂郎師はこの八月に関西へ旅し、舞鶴の浜明史・福恵夫妻らと出会っています。これは夫妻らと魚の糶市を吟行した時の句です。舞鶴には京都で一番大きな糶市場があり、その活気を「糶の指数ひしめける」と詠んでいます。この句の前に「鯖雲に入り船を待つ女衆」という句がありますから、文字通り鯖の大漁だったのかもしれない。

沸き上がる海を筆りて波の花

(句集『波の花』より平成十四年作)

この句は佐渡吟行の時得られたもので、句集を『波の花』とした理由を器師は「あとがき」このように述べています。「佐渡吟行は私には最も感動が大きかった。その時はじめて(私意を離れる)ことができたように感じたのである。」私意とは私欲をむさぼる心、私情を交えた公平でない心のことです。器師はこの句が得られたことにより「命ふたつ」の私の命(私意)をすべて対象に預けることができたのです。「沸き上がる海を筆りて」は自然という対象の人間には及ばない偉大な力なのです。

無宿の墓吸い付け煙草雪にさす

(句集『波の花』より平成十四年作)

器師は佐渡の金山で過酷な労働を強いられた、「無宿人」の墓に佇んでいます。周りは深い雪です。吸いかけの煙草を雪に挿し、手を合わせることでできません。同じように「生きて地獄死して深雪の山椿」という句があります。流人たちの魂を代弁している句です。

むかしをとこの

南うみを

鮎追ふや川面ひたすら竹で打ち
青蘆の茎に結へて魚籠の紐
瀬がしらの暮れ残りたる鮎膾
つくづくと齡は齒より胡瓜もみ
草笛を吹く子に村の蕎麦屋訊く
老鶯のひびける辺り蕎麦屋てふ
朴若葉明かりに作務衣蕎麦を打つ
蕎麦喰うてとほき河鹿にまどろめる
業平の墓へ夏草およぎつつ
この石が在五の墓と黒揚羽
不如歸むかしをとこの墓はやす
笹百合や業平の脛しらじらと

竹間集

同人作品



更の暁

小林 輝子

夏の暁おいてけぼりを喰ひにけり
夫乗せて青山に入る霊柩車
足もとに桐の一花や野辺送り
六月の朝日子の寄る鯨幕
訣れ道夫の選べる夏の霜
百合匂ふ遺影の夫の長寿眉
夫の死後うはばみ草の花に雨

筍掘り

岩木 茂

筍を探す蹠のもどかしき
竹林の暗さにも慣れ筍掘る
筍五本掘るに力を使い切る
筍の欠片の残る穴埋めて
筍の十二単衣の皮ならむ
筍を一気に湯搔く大竈
竹林に筍の皮捨ててある

虹

田村すゝむ

咲き満ちて散り急ぎぬる沙羅の花
流れ星宇宙の闇に地球青し
寺の鈴吊り風を待つ山法師
夏山恋ふ昭和の歌の喫茶店
出来るなら虹より先に我消えたい
咲き満ちて地上へ急ぐ山法師
開け易し夢に立つ人皆無口

蛩の夜

田中佐知子

夕星やふらここの揺れ置き去りに
卵焼き食べてすこやか昭和の日
花びらを集めアンネの薔薇香る
麦秋や聖書一冊卓上に
城跡に城主の幟青嵐
絹張りの谷垣源治蛩の夜
庭の蛩籠の蛩や明滅す

はじき豆

橋添やよひ

はじき豆はじき佳境の話かな
遣り過ごすしか無き疫や繭籠る
松の芯こぞり疫病寄せつけず
疫鎮め八坂に眠り青葉木菟
若葉冷えつづく御苑の不開の扉
逃げ水や御所の衛視の砂利の音
ただならぬ日々となりけり夏マスク

母の日

中村 洋子

母の日の真岡木綿の肌ざはり
半円に海引き寄せる卯波かな
三歳児に合はす父の歩聖五月
シャツたたむ折り紙のやう夏来る
仏めく磯岩伝ひ卯波立つ
百人に百のふるさと祭かな
ぼうたんも仁王の五指も力満つ

五月の海

森高 武

春うれひ予定消えゆく次々と
サーファアの消えてしまひぬ五月尽
草ふぐの集団となる初夏の磯
はまなすや波は激しく砕け散り
横殴りの雨よ五月の荒海よ
湧くやうに流れるやうに里若葉
ばらばらと巢立ち鳥来て動けずに

青 嵐 浜 福恵

よなぐもるコロナ感染ゼロの街
「路千本」に煮つめて遠き家郷かな
土曜診療の医院に咲いて白牡丹
更衣母より老いて母を恋ふ
入山の鐘の一打や墓の鳴く
雨あがり浮葉の色に雨蛙
青嵐や若狭は水の美し国

桐の花 門伝 史会

菘碗豆自粛の日々に育てをり
しぶの香の傘覆ひある牡丹かな
灯をともし留守の交番夕薄暑
万太郎忌ぶつぷつ囁みて麦の飯
北斎の「龍」の目に逢ふ祭来る
襟元の少し気になる更衣
桐の花まだ新しき句碑の文字

新茶の香 鈴木 石花

夏立つや日に三錠の膝葉
嵩を為す手造りマスク花は葉に
若葉風外出禁止の靴磨く
富士近き吾子より届く新茶の香
楽しみのまた一つ減る五月場所
交響詩「橋のない川」さみだるる
出揃うて矢筈模様の青芒

夏の海 山田 暢子

省みることのみ多し青葉潮
六月や老いても来たる誕生日
風鈴を外せば風も去りにけり
百日紅一筆箋の見馴れし字
蛇よりも人の悲鳴に身を躲す
夕焼けて髪に残りし汐湿り
記憶みなつなぎ合はせて夏の海

山河集

同人作品



南うみを選

生国は同じと弾む花見かな
薄暑かな輝く波の繰り返し
蔵王権現青く怒れる山桜
どの山も色いつはらず鯉幟
縄文の村春霞してゐたり
来ぬ人を定家かづらの道に待つ
母の日や金釘文字は母に似ず
畳縁踏んでしまひし更衣
卯波立つホームで分ける握り飯
芸妓より父に土産の粽かな

奥田 茶々

渦潮をまたぐ海橋夏立ちぬ
旭日の大漁旗や南吹く
夏立つや水細うして鎌を研ぐ

岡本 尚子

帰り来て筒鳥山の扉をたたく
母の日の嫁の名で来る宅急便
降り出して八十八夜の雨雫
ひとひらの歪み崩るる牡丹かな
時雨煮の伽羅のいろなり傘雨の忌
桐の咲く茂吉の村に入りにつけり
葉桜や梁に薄らぐ千社札

森田 節子

日は海に傾く出羽の植田かな
同封の写真は山河植田澄む
よちよちが転んで起きて柿若葉
段畑の短き畝や朴の花
糠雨や傘の余白に花菖蒲

石井美智子

初夏の風

高村 令子

鬱解けて一つの春の終りけり
花は葉に風音日々に変りゆく
万緑や鶴山城址空を統ぶ
手で叩く城の石垣三鬼の忌
新緑や天よりも地の輝きて
空に描く弧ののびやかに夏燕
野に佇てば吾も一草初夏の風
杖の身の蝶に置かれてしまひけり

夏木立ちちらちらと見ゆバンガロー
夏の草蝶の重みに弾みけり
踊り子草視野の中へと児を放つ
野遊びの遙かなる児へ声渡す
一家族去りて夏野の風残す
ことごとく田の植ゑられし中戻る
青田原風滑らかに流れけり
水張つて一村つなぐ夕蛙
山の香の寢息を立てて日焼の子
夏の月残して去りぬ子の家族
手抜きして過す余生や冷奴
山に生れ山に終る身沙羅の花

風土独語／南 うみを



「アオ」は蛇の青人将のことです。庭木の剪定で樹上にいるのを見つけたのです。植木屋は事も無げに青大将を掴み放りました。植木屋にとって日常茶飯なのでしょう。臨場感があります。

渦潮をまたぐ海橋夏立ちぬ 岡本 尚子

「渦潮」と「夏立つ」の季重なりですが、この場合「渦潮」は夏の渦潮（モノ）とし、「夏立ちぬ」が季語となります。渦潮を跨ぐ巨大な鳴門大橋の景色は夏そのものです。

木漏れ日か風か影濃き夏蝶か 根岸 善行

作者は緑蔭に佇んでいます。風に絶えず揺れる木漏れ日を見てみると、ひととき濃い影が過ぎ去りました。見上げると揚羽蝶がみるみる小さくなっていきます。あの影はそうだったのかなど。「か」の疑念の助詞を繰り返し判然としない意識を表出しました。

糠雨や傘の余白に花菖蒲 石井美智子

これは糠雨の菖蒲園を描いています。読みのポイントは「傘の余白」です。これだけでなくさんの人々が花菖蒲を楽しんでいる様子を想像させます。傘で溢れた菖蒲園を俯瞰できます。

山羊の子に角の兆すや雲の峰 菅原 末野

「山羊の子」と「雲の峰」の取り合わせです。山羊の子の頭に突起が見えています。角が生え始めたのです。空にはもくもくと「雲の峰」が聳え、山羊の子の元気を象徴しています。

どの山も色いつはらず鯉幟 上辻 蒼人

俳句は作者が残した表現世界の余白を、読み手が想像することにより完成します。この句の余白は「どの山も色いつはらず」です。まず「鯉幟」の頃の若葉の山を想像し、山によって緑の濃淡の違いが浮かんだらこの句は完成します。今年も山々の生命力をいただくのです。力強い景色です。

菖蒲湯の児はむつちりと湯を弾く 森田 節子

これも端午の節句の世界です。邪気を払い心身を清めますが、福々しい児の体が湯を弾くのです。「むつちりと」が児の元気な未来を約束しているようです。

来ぬ人を定家かづらの道に待つ 奥田 茶々

「定家かづら」の花は褪せると花冠が裂け、花びらが風車状にねじれます。その様相と謡曲「定家」の式子内親王との恋の妄執に由来して「定家かづら」と呼ばれています。「来ぬ人」は恋の破綻を暗示しているかのようです。

「アオ」と呼び植木屋蛇を放りけり 高橋まき子

風土集



南うみを選

固まりて古代のいろに葦かな 川崎 森田 節子

似顔絵の口笑顔やこどもの日
葉桜や製菓の道具娘にゆづる
菖蒲湯の児はむつちりと湯を弾く
初幟名を筆太にひるがへる

吾に吹き赤子にも吹く若葉風 逗子 高橋まき子

キツチンの小窓大切愛鳥日
放課後の金魚係が腕捲る
「アオ」と呼び植木屋蛇を放りけり
児等の声聴く初夏の潮溜

春雷をこつんと空の棚に置く 上尾 根岸 善行

懐に潮の香り更衣
木漏れ日か風か影濃き夏蝶か
反転の金魚ゆつたり鱈使ふ
大病の果ての長生き風薫る

翅広げそこね天道虫歩く 静岡 菅原 末野

夕風や代田にゆるる暮らしの灯
田植機の水に急かされ動き出す
浦の灯の残らず消えて月見草
山羊の子に角の兆すや雲の峰

先客の花蜂と遇ふ析の花 いわき 佐藤やすこ

明日ひらく大山蓮華の香氣かな
波寄せて藍濃くなりぬ浜豌豆
初鯉一本提げて夫の客
会へぬまま友旅立ちぬ五月尽

葦の香の未だかすかや古すだれ 宇治 渡辺やや

どくだみや蔵の分厚き大引き戸
温き湯に手足伸ばしぬ田植糸あと
ひなげしのまちまちにゆれみんなゆれ
夏服に替はり車掌のきびきびと